

キャリア教育における 職業意識の形成をめぐる一考察

山 岸 竜 治

Ryuji YAMAGISHI. A Study on Formation of Vocational Consciousness in Career Education. *Studies in International Relations* Vol.38, No.1. October 2017. pp.43-50.

Career education based on the instability of employment of young people, therefore places priority on “formation of occupational consciousness”, and also has the ideology of “labor is good”. However, the ideology of “labor is good” holds the danger of turning into an ideology of “unemployed is evil”. That ideology, for example, leads to the exclusion of disabled person who cannot work. In this sense, career education focusing on “forming occupational consciousness” has a paradox and its associated dangers.

We must also remember to ask carefully, how to think of people who cannot work like disabled people while developing career education. The development of such career education will be opportunities for understanding minorities like disabled people, and furthermore it will develop into opportunities for learning about diversity and inclusion.

1. はじめに

1.1. 問題意識

本稿は、キャリア教育における職業意識の形成について、相模原障害者施設殺傷事件（以下「相模原事件」と記す）を手掛かりとして、考察するものである。萌芽的な性格の研究であり、研究ノートとして提出する。

過日、相模原事件の容疑者に共感するという人物が、テレビに出演して「生産性の低い障害者は社会に貢献していない、だから排除してよい」という意見を述べているのを視聴した。その人が、しかし一方で、いわば「勤労意識の塊」のような人だったので、筆者にはキャリア教育のことが連想された。

キャリア教育は、「職業意識の形成」を重点化した教育活動である（例えば本田，2009，p.138）。つまり、あたかもキャリア教育によって作り出されたかのようなその人が、しかしその一方で、殺人をおかした相模原事件の容疑者に共感を示し、障害のために働「け」ない人——働「か」ない人ではなく——に対して冷酷な見方を示していたの

である。そこには善と悪が入り混じったような、逆説的な何ものかが感じられる。

本稿では、相模原事件を手掛かりに、障害者あるいは障害のために働「け」ない人と関連づけた考察を行い、そのことを通じて、キャリア教育展開の注意点や発展性について考えてみたい。

1.2. 先行研究の検討

本稿は、上記のような問題意識に基づくものであるから、どちらかといえば、キャリア教育を批判的に吟味するものとなる。キャリア教育に関しては、それを「よきもの」と肯定的に捉え推進に注力した研究がある一方で、批判的な研究も少なくない。

前者については、藤田（2014）の研究を欠かすことができない。藤田は、2008年～2013年、「文部科学省キャリア教育担当調査官」であった人物であり、したがって、彼の研究は、肯定・推進派の代表的かつ決定版的な先行研究として位置づけられる。そのほか、三村（2004）、明石（2006）、山崎（2006）といった研究者による研究が挙げられる。

一方、後者については、まず、いずれも教育現場から発信された、全国進路指導研究会（2006）、及び斉藤ら（2009）による研究が注目される。また、児美川（2007；2011；2013）、本田（2009）、筒井（2012）といった研究者による研究が挙げられる。さらに、いずれも「進路指導」の功罪を論じたうえで「キャリア教育」について警鐘を鳴らした、望月（2007）、及び荒川（2009）による研究を挙げることもできる（なお「進路指導」と「キャリア教育」の関係については、「2.1.」で後述する）。

本稿は、逆説的な何ものかを感じ取ったことを考察の出発としているが、上記の中には、このタイプの先行研究——すなわち、キャリア教育の逆説性あるいは逆機能性を指摘した研究も幾つか存在している。

例えば、正規と非正規の生涯賃金の格差を教えることが、かえって既存秩序への適応を迫り、子どもや若者を将来、雇用者にこそ都合のよい従順な労働者へと導いてしまうのではないか、いいかえれば、児童・生徒・学生よりも雇用者のための教育にこそなっているのではないか、と危惧的に指摘した研究がある（児美川，2013）。また例えば、夢を実現する重要性や素晴らしさを説くあまり、結果的に子どもや若者をリアリティの希薄な「夢追い人」にしてしまうのではないか、という、やはり危惧的な指摘を行っている研究も存在する（荒川，2009；児美川，2013）。

批判的な方向性を持ちつつキャリア教育の逆説性／逆機能性を指摘したタイプの先行研究においては、以上のような論点が提出されているが、しかしながら、障害者あるいは障害のために働「け」ない人と関連づけた、いいかえれば福祉的な視点を持った、先行研究は見当たらない。本稿を、萌芽的な研究として提出する意義はあるもの、と考える次第である。

2. キャリア教育をめぐる基礎的事項の確認

2.1. 進路指導とキャリア教育

「1.1. 問題意識」で触れたように、キャリア教育は「職業意識の形成」を重点化した教育活動で

ある。このことは、例えば「キャリア教育」を「進路指導」と比較するとき、鮮明になるものと思われる。以下に見てみたい。

進路指導とキャリア教育——両者はいずれも、①子ども・若者の将来を考えて②学校の教育活動全体を通じて行われる③機能概念的な教育活動であるなど、複数の点で共通性があり、全体として極めて似通っている。それでは、反対にどう違うのであろうか。

両者の異同については、前出（「1.2.」参照）の藤田（2012，p.19）によって次のように明解に説明されている。

キャリア教育は就学前教育から高等教育に至るまで、全ての学校で実践されるべきものであるのに対し、進路指導は中学校・高等学校などの中等教育段階の教育課程のみに位置づけられてきました。このような対象の違いは大きいにせよ、キャリア教育と進路指導は本質的に同じ理念に基づく教育活動です。

すなわち、両者は本質的に同じ理念に基づいているものの教育期間に違いがある、というわけである。しかしながら、両者の定義を注意深く見比べてみると、さらに別の違いも指摘できるように思われる。

まず、進路指導の代表的な定義——大学生向けの教科書（吉田，2008，p.71）に紹介されているもの——を見てみよう（アンダーラインは山岸による）。

生徒の個人資料，進路情報，啓発的経験および相談を通じて，生徒がみずから，将来の進路の選択，計画をし，就職または進学して，さらにその後の生活によりよく適応し，進歩する能力を伸長するように，教師が組織的，継続的に指導・援助する過程（文部省，1976，pp.6-7）

一方、代表的なキャリア教育の定義——やはり大学生向けの教科書（吉田，2006，p.35）で紹介されているもの——は、次のようなものである（ア

ンダーラインは山岸による)。

キャリア教育とは、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育、端的には児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育（文部科学省，2004）

このように両者の定義を比べて見てみると、次のような違いを見て取れるであろう。

進路指導においては、「能力を伸長する」とされ、「能力」にフォーカスして「能力アップ」が重視されている。これに対して、キャリア教育においては、「端的には……勤労観、職業観を育てる」とされ、「観＝意識」がフォーカスされ「職業意識の形成」に重点が置かれている。

もっとも、「キャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる」と記されているように、キャリア教育も「能力」路線を完全に捨て去ったわけではない。要するに、キャリア教育というのは「能力アップ」に、さらに「職業意識の形成」を加えて、かつ重点化した教育活動である、といえる。

このように「進路指導」と比較するとき、「キャリア教育」における「職業意識の形成」の重点化、という特徴が鮮明になるのである。

2.2. キャリア教育のイデオロギー性

ちなみに、筆者が中学・高校生を過ごした1970～1980年代には、進路指導は存在したもののキャリア教育は存在していなかった。では、なぜ、そもそも進路指導が存在していたにもかかわらず、キャリア教育が登場してきたのか。

文部科学行政上、「キャリア教育」という言葉が最初に登場したのは、1999年12年の中央教育審議会による「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」である（本田，2009；児美川，2013）とされるが、その「第6章 学校教育と職業生活との接続」の冒頭には、次のように記されている。

新規学卒者のフリーター志向が広がり、高等学校卒業業者では、進学も就職もしていないことが明らかな者の占める割合が約9%に達し、また、新規学卒者の就職後3年以内の離職も、労働省の調査によれば、新規高卒者で約47%、新規大卒者で約32%に達している。（文部科学省，1999）

すなわち、1990年代の後半の時期、若者就労の不安定性——具体的にはニート・フリーター問題や早期離職問題など——が社会的に注目され、また不安視されるようになっており、そのための対応策が求められ検討が始まったものと思われる。そして、1999年にいったん「キャリア教育」という言葉が登場して以降は、文部科学省以外の省庁も加わって「キャリア教育」という言葉ないし概念を用いた政策提案が矢継ぎ早に出されるようになったようである。

例えば、2003年6月の「若者自立・挑戦プラン」（文部科学省）、あるいは2004年12月の「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」（内閣府、経済産業省、厚生労働省、文部科学省）などがそうである。また、文部科学省の事業として、2004年からは「キャリア教育推進地域指定事業」が、そして、2006年からは「キャリア教育実践プロジェクト」が、それぞれ開始されている（本田，2009，p.136；児美川，2013，p.36）。

児美川（2013，p.40）は、このプロセスを「若年雇用が問題化→日本経済や社会の将来への不安材料→若者をテコ入れする必要性→キャリア教育」という簡潔な図式で明晰に説明している。実際、例えば三村（2004，p.13）は、次のように述べている（アンダーラインは山岸による）。

2003年、内閣府『平成15年版国民生活白書～デフレと生活—若年フリーターの現在～』にて「フリーター417万人」という数字が発表されると同時に、わが国の今後の経済成長阻害や社会不安の増大への懸念が表明され、その改善方法として、キャリア教育が脚光をあびることになった。

この他にも、2000年代半ばには、複数の研究者によって「若者がきちんとした職業観・勤労観を持たないためにニートやフリーターとなっていく現状は、好ましいものではない。であるから、キャリア教育が必要だ」という趣旨の著書があらわされている（例えば明石，2006；山崎，2006）。

このようにして、進路指導に加えて、さらに新たにキャリア教育が登場したのであった、と思われる。

前項の「2.1.」で見て取った、キャリア教育における「職業意識の形成」の重点化、という特徴も、以上に見たような、キャリア教育の出自ゆえのことである、と考えられよう。つまり、若者就労の不安定性をその出自としているキャリア教育であってみればこそ、それゆえに「職業意識の形成」が重点化されているわけである。

したがって、キャリア教育というのは実はイデオロギッシュなものである、という指摘もできる。すなわち、キャリア教育には「労働イコール善」というイデオロギーが濃厚に流れている、といえる。児美川（2013，pp.44-46）は、「はじめに『若年雇用問題』ありき！」で出発したことから、「キャリア教育の焦点が、職業や就労だけに当たってしまっている」という「現実態」を指摘しているが、このことは、キャリア教育がその出自ゆえに「労働イコール善」というイデオロギーをはらんでいる、そのことの反映と見られる。

3. 相模原事件を手掛かりに考える

3.1. 勤労意識と障害者排除

さて、「1.1. 問題意識」で触れたように、「勤労意識の塊」のような人が——すなわち、あたかも「職業意識の形成」を重点化したキャリア教育によって作り出されたかのような人が、テレビに出演して相模原事件の容疑者に対する共感を示していた。善と悪が入り混じったような、逆説的な何ものかがあるように感じられる、この事象を分析してみたい。

この分析から、キャリア教育に内在している或る種の危険性を、キャリア教育展開の注意点として析出できるように考えるからである。以下に、

具体的に論じてゆきたいと思う。

きっかけは、NHK教育テレビ（Eテレ）の福祉番組である『バリバラ～バリアフリーバラエティー～』において、次のような「声」が紹介されたことである。

知的障害者の人たちと暮らすために
周囲の人が支払う労力や金銭を考えると
今回の犯人の思考は少なからず
理解できてしまう。

私は知的障害者に対し、これまま（原文ママ）
差別的感情を持っていたし、
それはこれからも一生なくならないだろう。

私は、知的障害者に対してこれまで
コミュニケーションがとれない相手を
他の人と区別なく対等に接することは
できない。（NHK教育テレビ，2016）

これは、田中さん（仮名）という30代男性の「声」である（なお叙述の流れから、「田中さん」については例外的に「さん」づけで表記することとする）。『バリバラ～バリアフリーバラエティー～』の、相模原事件の特集回で紹介されたものであるが、そもそもは番組への投稿メールであったという。

田中さんは、さらに『バリバラ～バリアフリーバラエティー～』の当該特集回に登場（録画出演）して、番組のレギュラー出演者であり障害当事者（脳性まひ）でもある玉木幸則と対談を行う⁽¹⁾、という成り行きになる。そして、その対談の冒頭、田中さんは次のように語る。

必要なお金ばかりかかって、じゃあ、障害者がお金を稼げるのか。知的障害者はお金を稼げない、と。そうすると、社会に貢献ができてない。周りに負担ばかりかかっている。そう考えた時に、今回の容疑者の意見は間違っていない、賛成できるな、という考えはあります。（NHK教育テレビ，2016）

これを受けて、玉木が「何をさして貢献というのか、何をさして役割というのか」と問うと、田中さんは次のように答える。

お金の稼げるっていう、「生産性」だとかそういうところだと思うんですね。働いて、お金を稼いで、税金を納めるみたいな……、（山岸注：そういう）ことができるっていうところだと思っています。（NHK教育テレビ，2016）

ここで玉木は、「だから排除していい」って、そういうことですね？」と田中さんの主張をいったん要約している。要するに、田中さんは「生産性の低い障害者は社会に貢献していない、だから排除していい」という考えの持ち主である。

ただし、対談が続いて行く過程において、田中さんは、やがて次のような語りをも見せることになる。

今、必死に生きているつもりで、実際、必死に生きているんですよ。理想はもちろん、みんな生きてなきゃいけないので、いま（山岸注：社会に）余裕がないのがいけないですよ。いま話をして自分が気づいたのは、根本の原因じゃなくて、目に見える現象の方を叩こうとしていたのかな……。 （NHK教育テレビ，2016）

3. 2. キャリア教育の理念型

障害者に対する排除を肯定していた田中さんは、実はその一方で、「必死に生きている」人でもあったのである。田中さんは「生産性」を重視——というか偏重している人だから、彼が「必死に生きている」というのは、「生産性」の低い人間にならないように「必死に生きている」ということであり、すなわち「必死に」働いている、ということを恐らく意味している。

要するに、田中さんは「勤労意識の塊」のような人なのである。実際、対談相手だった玉木によれば、「田中さんはある大きな会社で正規社員として働いているが、いつクビを切られるか分からないから一生懸命やっているというのがすごく伝わっ

てきた」という（NHK教育テレビ，2016）。

田中さんは30代であるから、2000年代に始まったキャリア教育を実際に受けたかどうかは微妙な世代である。とはいえ、「職業意識の形成」を重点化したキャリア教育が、場合によっては、田中さんのような内面の人、すなわち「勤労意識の塊」のような人を作り出すものである、ということはいえるはずである。

つまり、いかにもキャリア教育が作り出したかのような人物である田中さんは、1事例であると同時に、キャリア教育が作り出す1つの理念型である、と考えられるのである。

4. 考察

4. 1. 勤労意識のパラドックス

「勤労意識の塊」のような田中さんが、一方で、障害者を排除する思考を持っているのだろうか。繰り返したが、そこには、善と悪が入り混じっているような、逆説的な何ものかが感じられる。

「勤労意識の塊」のような人であること自体は、悪いことではない。それどころか、むしろ、よいことのはずである。

だがしかし、田中さんが障害者に対する排除を肯定している点には、疑問を感じざるを得ない。特に、排除＝殺害が肯定されている点は、それは重大な犯罪なのであるから、見過ごしにはできないことである。

田中さんにおける、障害者に対する排除＝殺害の正当化は、障害者が生産性の低さから社会に貢献していない、という理由によっている。しかしながら、実は、その田中さん自身がクビを切られないように「一生懸命やっている」、すなわち自分自身が生産性の低い人間にならないように「必死に」働いている、という。

ここに問題があるのではないのだろうか。

田中さんは、「必死に」働いていて自分自身が高い生産性を保っているまさにそのために、次のような思考で、障害者の排除＝殺害にさえも共感を示すのではないか。すなわち、「自分は『必死に』働いて高い生産性を保ち社会に貢献している、に

もかわらず、世の中には生産性の低い者がいるではないか。その者たちの存在は、自分の『必死さ』に照らして認めがたい、いっそ排除して構わない——田中さんの思考は、おおよそでこういうところなのではないのか。

田中さんは「勤労意識の塊」のような人だが、まさにそうであるがゆえに、働いていない他者に不寛容で排他的なのである。恐らく、「労働イコール善」というイデオロギーが煮詰まって「不就労イコール悪」というイデオロギーに転化してしまっているのだ。

「勤労意識の塊」にはパラドックスが潜在しているのである。

4. 2. キャリア教育の注意点

見たように、田中さんという事例においては、「労働イコール善」から「不就労イコール悪」への転化が認められる。彼の内面には生産性への偏重があるため、自らの生産性確保のために「必死に」働いているのだが、そのことが、不寛容で排他的なマインドを醸成し、生産性の低い障害者を排除する思考を発生させていたのであった。

田中さんが「勤労意識の塊」であり、すなわち「職業意識の形成」を重点化したキャリア教育が作り出す理念型であることに照らすと、キャリア教育というのが、或る種の危険性を内在させた教育活動であることが指摘できる。それは、キャリア教育の教育量や対象者の資質によっては、被教育者に「不就労イコール悪」のイデオロギーを抱かせ、さらには障害者のような働「け」ない者に対する排除の思考をも発生させかねない、という危険性である。

キャリア教育には注意が必要なのである。

4. 3. キャリア教育の発展性

しかし、「ピンチはチャンス」であるのかもしれない。例えば「職業意識の形成」の重要性——これはこれで重要である——を説きつつ、それと同時に、「では、働『け』ない人、例えば障害のために働『け』ない人のことはどのように考えればよいのか」という問いを発しながらキャリア教育を展開することも、できないわけではないだろう。

そして、そのようにデザインして展開すれば、キャリア教育は、「不就労イコール悪」という教条的なイデオロギーを、障害者などのマイノリティーの立場から相対化し考え直すよい機会になる、とも思われる。

このように考えてくると、キャリア教育というのは、その展開の仕方によっては、国際的なトレンドであるダイバーシティ（diversity：多様性）やソーシャル・インクルージョン（social inclusion：社会的包摂）を学ぶ、よい教育機会として提供することも可能である、ということもいえるであろう。

5. おわりに

5. 1. まとめと今後の課題

キャリア教育は、若者就労の不安定性——ニート・フリーター問題や早期離職問題など——を出自とした教育活動である。それゆえ「職業意識の形成」が重点化されており、また「就労イコール善」というイデオロギーが濃厚に流れている。

しかし、「労働イコール善」というイデオロギーは、煮詰まれば「不就労イコール悪」というイデオロギーに転化し、さらには働「け」ない人——例えば障害者——に対する排除の思考へとつながっていく危険性を秘めている。つまり、「職業意識の形成」を重点化したキャリア教育には、パラドックスとそれに伴う危険性が秘められている、といえるのである。

田中さんという「勤労意識の塊」のような人が、一方で、生産性の低さを理由に障害者の排除＝殺害を肯定していたのは、このパラドックスによるものと考えられる。すなわち、「必死に」働いている田中さんは、「労働イコール善」というイデオロギーをその「必死さ」ゆえに煮詰まらせ、「不就労イコール悪」というイデオロギーに転化させてしまっており、それゆえ働いていない障害者を——障害者においては働「か」ないのではなく、働「け」ない場合が多いにもかかわらず——「悪」と捉え、あげく抹殺対象と見なしていたものと思われるのである。

しかし、どうであれ、障害者が働「け」ないこ

とを理由に排除されてよいということは、絶対的にあってはならないことである。

われわれは、キャリア教育を展開しつつ、同時に、障害者のような働「け」ない人をどのように考えればよいのかを問うことも、忘れてはならないのである。そのようなキャリア教育の展開は、むしろ、障害者などのマイノリティーに対する理解のよい機会となり、さらには国際的なトレンドであるダイバーシティやソーシャル・インクルージョンについての学びの機会にも、発展していくことであろう。

今後の課題として、以上に示唆した発展性を具体化した、キャリア教育の実践案を示すことを挙げておきたい。

5. 2. 結びに代えて

障害のために働「け」ない人をどう考えるのか——それは教科書の類には記されていない。したがって、教師が自分の言葉で語らなければいけない、ということになる。

では、私に語れるだろうか。私が教師だったら、どのように語るのだろうか。最後にそれを示しておきたい。

障害というのは、ある一定の割合で集団の中の誰かに生じるものである。であるから、障害当事者というのは、実は、集団の誰かが被らなければならなかった障害を引き受けてくれた人ともいえる。

誰かが引き受けなければならなかったものを、引き受けてくれたわけであるから、それは、引き受けるという仕事をしている、とはいえないのだろうか。

障害のために働「け」ない人というのは、お金を稼ぐ種類の仕事はしていないが、その代わりに他の人々がお金を稼ぐ仕事ができるように、障害を引き受けるという仕事をしている、と私は思う。お金を稼ぐだけが仕事ではないはずなのである。

【注】

- (1) 参考までに、以下に、番組ホームページから当該部分に関する解説を引用しておく。

障害者は社会に貢献してない？ 30代男性との対話

事件発生後、バリバラ宛てに500通をこえる意見が寄せられた。その中には容疑者の意見に賛同する声もあった。30代の男性からのメールには『知的障害者の人たちと暮らすために周囲が支払う労力や金銭を考えると容疑者の考えを理解できてしまう』と書かれていた。今回バリバラではその真意を聞きたいと取材交渉。番組レギュラーの玉木幸則との対談に応じてくれることになった。なぜ男性は容疑者の考えに共感したのか。話しを聞いた。

これまで障害者につきあった経験がないという男性、「知的障害者はお金稼げてない、社会に貢献できていない、周りに負担ばかりかけている、と考えた時に、今回の容疑者の考えには賛成できる」と語った。生産能力によって人間の価値が決まるという考え方は決して一部の特別の人たちの考え方ではない。

それに対し、玉木さんは、自分自身の生きる価値が否定されたらどう感じるかと問いかけた。すると男性は、「僕は健康な健常者だから他人事なんですよ、結局。他人事だから自分に矛先がむかってないことに安心する」と言い、「命が大事みたいなことを言い出したらキリがない。自分のおばあさんが寝たきりになって、毎月何百万かかります、何千万かかりますとなったとき、社会全体にそれを許す余裕があるのか」と話した。「あなたが70歳になって体が動かなくなったときに殺されても仕方ないってことですね？」とさらに問いかける玉木さん。議論の末、男性は「いま必死に生きているつもりで、実際必死に生きているんですよ。(社会に) 余裕がないのがいけないん

ですよ」と言い、「根本じゃなくて、目に見える現象を叩こうとしていたのかな」と話した。
(<http://www6.nhk.or.jp/baribara/lineup/single.html?i=343&s=1#top>) (2017年6月25日閲覧)

【文献（テレビ番組を含む）】

- 明石要一（2006）『キャリア教育がなぜ必要か——フリーター・ニート問題解決への手がかり（学級教育の改革シリーズ）』明治図書出版。
- 荒川葉（2009）『「夢追い」型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂。
- 藤田晃之（2012）「生徒指導とキャリア教育との関係を整理する——一石二鳥の実践を目指そう」『月刊生徒指導』第42巻第8号（7月号），pp.18-21，学事出版。
- 藤田晃之（2014）『キャリア教育基礎論』実業之日本社。
- 本田由紀（2009）『教育の職業的意義——若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房・ちくま新書。
- 児美川孝一郎（2007）『権利としてのキャリア教育（若者の希望と社会）』明石書店。
- 児美川孝一郎（2011）『若者はなぜ「就職」できなくなったのか？——生き抜くために知っておくべきこと（どう考える？ニッポンの教育問題）』日本図書センター。
- 児美川孝一郎（2013）『キャリア教育のウソ』筑摩書房・ちくまプリマー新書。
- 三村隆男（2004）『キャリア教育入門——その理論と実践のために』実業之日本社。
- 望月由起（2007）『進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪——高校進路指導の社会学』東信堂。
- 文部省（1976）『中学校・高等学校進路指導の手引——中学校学級担任編』日本職業指導協会。
- 文部科学省・中央教育審議会（1999）「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」。
- 文部科学省・キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（2004）「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書——児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために」。
- NHK教育テレビ（2016）『バリバラ～バリアフリーバラエティー～：突撃！障害者殺傷事件』12月11日，19：00～19：30。
- 齊藤武雄・他（編）（2009）『ノンキャリア教育としての職業指導』学文社。
- 筒井美紀（2012）「労働法教育はなぜ不可欠で、どう実行すればよいのか？（教育理論講座）」『教育と文化』通巻第66号，pp.106-120，アドバンテージサーバー。
- 山崎保寿（編）（2006）『キャリア教育が高校を変える——その効果的な導入に向けて』学事出版。
- 吉田辰雄（2006）「第1章 生徒指導・進路指導の歴史と発展」吉田辰雄（編）『最新 生徒指導・進路指導論——ガイダンスとキャリア教育の理論と実践』pp.9-36，図書文化。
- 吉田辰雄（2008）「第2章第3節 進路指導・キャリア教育」吉田辰雄・大森正（編）『改訂新版 教職入門——教師への道』pp.71-80，図書文化。
- 全国進路指導研究会（2006）『働くことを学ぶ（若者の希望と社会）』明石書店。